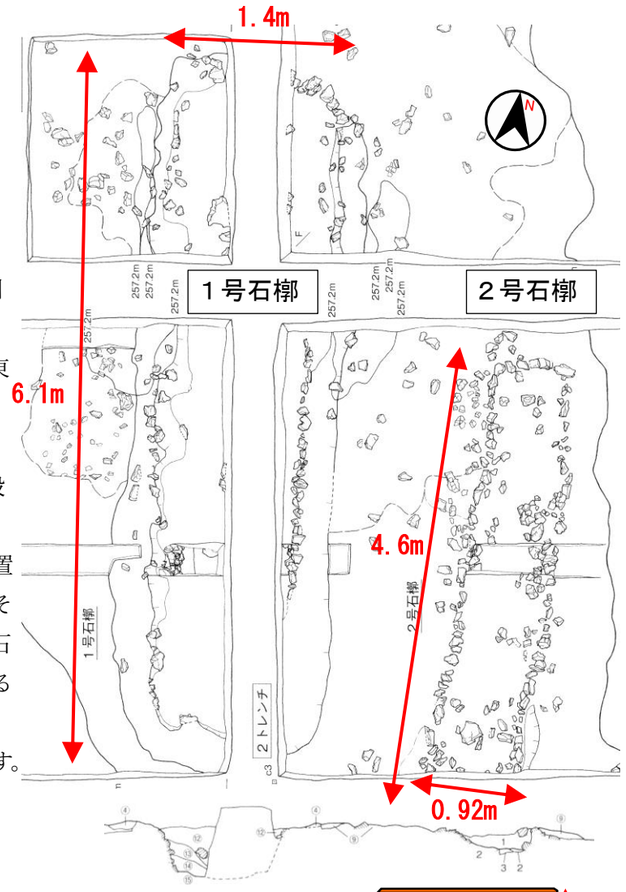
（４）後円部墳頂

後円部の中央を、土層観察用の十字の畔を残して掘り下げたところ、埋葬施設として竪穴式石槨（たてあなしきせっかく）（石槨：棺を入れる石の外箱のこと）が２基確認されました。

１号石槨は、墳頂の中心に存在し、長さ 6.1m、最大幅 1.4m と長大で、南北を向いています。北側のほうが幅広のため、北に頭を向けて葬られたと考えられます。２号石槨は小形で、１号石槨の南東に位置し、南北を向いています。１号、２号とも 10～15 ㎝大の小形のチャート礫を積んで壁を築いています。大きさから、１号が中心となる埋葬施設で、２号がそれに従属するものと考えられます。

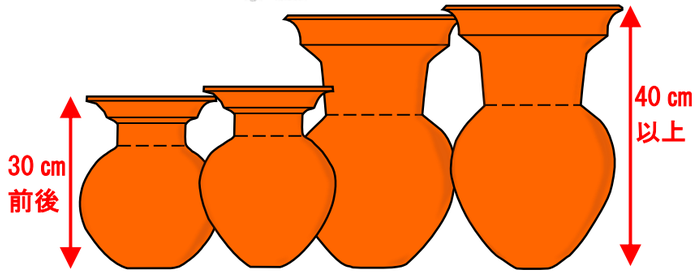
本来であれば、石槨の上部に蓋石または木蓋を置いて、粘土で密封したのち盛土をするのですが、それらの痕跡は残っていませんでした。そのため、石槨の上部は、本来の高さからかなり削平されていると推定されます。

石槨の内部構造や副葬品については、未調査です。



（５）出土遺物

後円部墳頂および後円部北・東・西斜面から、多数の二重口縁壺が出土しました。このことから、本来墳頂に二重口縁壺が並べられて祀られていた可能性があります。二重口縁壺の大きさには図のとおり大小２種類存在するようです。いずれも底部には穴が開いており、焼成前に指で穴をあけたものと、工具で穴を開けたものが存在します。これらの二重口縁壺の形から、小森古墳が築造されたのは古墳時代前期中ごろ（４世紀前半）と考えられます。なお、小森古墳では、この他に小壺が採集されています。



４　まとめ

小森古墳は、笠置峠古墳（古墳時代前期初頭）に続く前方後円墳であること、２基の竪穴式石槨をもつことが判明しました。古墳の平面形はゆがんだ形であり、笠置峠古墳と同じく地形上の制約を受けていると考えられます。また、岩盤を整形して墳裾をつくり盛土をする方法は、笠置峠古墳とよく似ており、築造技術の共通性を感じさせます。一方で、笠置峠古墳で確認された飲食儀礼に伴う高坏や土製品は確認されず、遺物の大半を二重口縁壺が占めていることから、儀礼に変化が生じている可能性があります。

今後は、小森古墳の過去採集遺物の整理により、飲食儀礼の有無を確認するとともに、後続するムカイ山古墳の調査と合わせ、宇和盆地で前方後円墳がどのように展開したのかを明らかにしたいと思います。

令和６年 12 月７日（土）

小森古墳試掘調査　現地説明会資料

西予市教育委員会

調査期間：平成 29 年～令和７年（来年度終了予定）
調査主体：西予市教育委員会

１　はじめに

宇和盆地には、24 ㎢という小さな平野内に笠置峠古墳（岩木）、小森古墳（山田）、ムカイ山古墳（杢所）という３基の前方後円墳が存在します。南予で前方後円墳が存在するのはこの宇和盆地だけであり、さらに３基も現存しているのは県下でも珍しいことです。前方後円墳は、一般的に古墳の墳形の中で最も位が高く、有力な豪族の墓とされています。そのため、西予市の歴史の上で重要というだけでなく、西南四国地域の豪族の墓がどのように移り変わっていくのか、豪族が古墳の上でどのような祭祀をしていたのか、どの地域と交流をしていたのかを確認できる点でも価値があると考えられます。

小森古墳は、これまで前方後円墳とされてきたものの、発掘調査がされていませんでした。昭和前半期には、芋畑として利用されて墳丘の改変や石積みが行われたため、本来の墳丘の形や構造が分かりにくくなっており、埋葬施設もどのようなものが存在するのか不明でした。

そこで西予市教育委員会では、古墳の範囲の特定、墳丘・埋葬施設の構造および墳丘上祭祀の把握により、他の古墳と合わせた適切な保存活用を図ることを目的として、平成 29 年度から試掘確認調査を実施してきました。

小森古墳の位置と周辺の遺跡（縮尺：1/8000）※標高 257m の丘の上に所在

2　調査の概要

調査目的

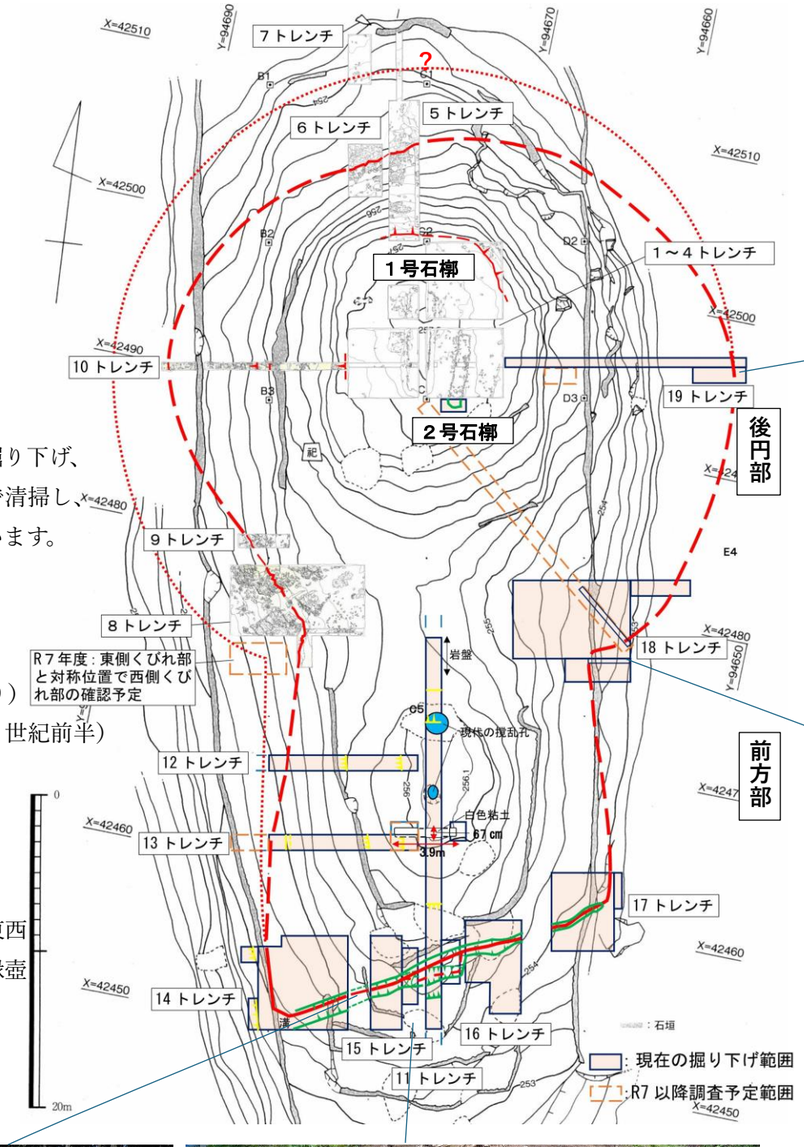
①古墳の範囲の特定
②墳丘構造の把握
③埋葬施設の把握
④遺物と墳丘上祭祀の確認

調査方法

調査区を設定してその範囲を掘り下げ、古墳の遺構が見つかったところで清掃し、写真撮影、図面作成を実施しています。

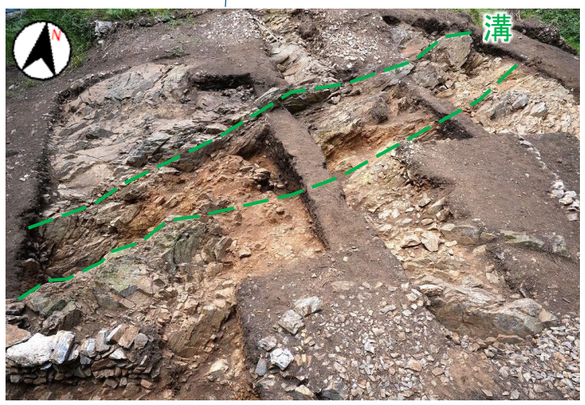
調査成果（R6.12.7 時点）

墳形：前方後円墳
長さ：52m（56m の可能性あり）
時期：古墳時代前期中ごろ（４世紀前半）
埋葬施設：竪穴式石槨２基
葺石：未確認　段築：不明
墳裾：岩盤を削って整形
　　前方部前面は溝で区画
遺物：後円部墳頂、後円部北東西斜面から多数の二重口縁壺が出土。副葬品は不明。



3　各調査区の成果

（１）前方部前面（南端）



岩盤を掘りくぼめた長く連続する溝を検出しました。ここが古墳の内外を区切る墳裾と考えられます。聖と俗を分ける結界のようなものでしょうか。(溝の長さ：21m、上端の幅：0.4～１m、深さ：0.4～１m)

これを墳裾とすると、前方部が南西側に突出した歪んだ平面形となります。

（２）後円部東斜面

写真の矢印のあたりが墳裾と考えられます。岩盤を削って整形している可能性があります。

（３）東側くびれ部

東側のくびれ部は、かなり削平を受けていましたが、岩盤の落ち込みを追っていくとくびれ（写真の緑矢印）が現れました。ここも、岩盤を削って墳形を整えていると考えられます。また、墳丘の内側を部分的に掘り下げたところ、角ばった石を多く含む土を、岩盤の上に盛っていることも分かりました。

想定より南側でくびれ部が確認されたため、反対側の西側くびれ部についても現在認定している地点より南側になる可能性が出てきました。これは、令和７年度に調査を実施し確認する予定です。